
転生者のハンターライフ【習作】

ままDoLL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者のハンターライフ【習作】

【Nコード】

N5351Z

【作者名】

ままDOLL

【あらすじ】

滑って転んであら不思議。

これはHUNTER×HUNTERの世界へと転生してしまった一人の男の物語。

プロローグ

Web小説。

なかでも二次小説とよばれる物でよく扱われるジャンルに、転生モノというジャンルがある。

まあ、知っている人は知っているし、知らない人は全く知らない。多分そんなものだ。

「うばー！あばばばー！！」

世間一般で言うオタクそのものであり、アニメ・漫画の原作だけでは飽きたらず、ネット上で二次小説を山ほど漁って読んでいた俺にとってはなじみ深いもの。

転生。

「あぶぶー……………」

俺にとって、転生とはまさに夢。

子供の頃ああしておけば、あの時こうしておけば……なんて後悔は、腐るほどある。

もう一度生まれ変わって、全てをやり直したい。

あわよくば、こんな現実を捨てて、漫画やアニメなどのファンタジーな世界で、おもしろおかしく生きてみたい。

そんな後悔や妄想が腐って、発酵して、得体の知れないネバネバとしたナニかを体から噴出しまくっているのが、俺だ。

「うぶぶぶ……」

いや、俺『だった』。

「うばばー！！」

何故俺がこんなこんな思考をしているのかというところ……。まあネット上の諸兄ならば、もう察しが付いているだろう。

どうやら、俺は転生してしまったらしいのだ。

わーいやったね。

アパートの階段から降りようとして、足を滑らせて……そのままお陀仏。

コンクリートに打ち付けた頭から何やら、どろっとした脳味噌的

なモノが流れ出たのを感じたと思ったら、何かを考える前にそのまま意識を失って、気が付けば。

「うぶう……」

赤ちゃんに生まれ変わっていた。

まあ痛いやら怖いやら感じる前に死ぬことができたっぽいのはラッキーだったと、今考えればそう思う。

痛いの嫌だし。

生まれ変わったといっても、自分の体が赤ちゃんになっていると気が付いたのが、ついさつき。

余りに理解不能な状況に混乱したり、半端じゃないほどの体の違和感に戸惑ったりしたが。

とにかく今は。

「あぶぶぶあー！ー！うばー！ー！」

この状況を何とかして貰うのが先だ。

元気に声を上げる赤ん坊の俺を、笑顔で見詰める両親？そんなものはどこにも居ません。

気が付いたときには巨大な門のような木製の和風な扉の前で、絶賛『放置中』。

毛布に包まれてカゴのような物の中に寝かされている俺の目の前にある空からは、しんしんと音もなく降り続ける雪。

……捨て子ですね。分かります。

「……………」

ってアホか！？死ぬ！死んでしまっ！

「あぶううあああ——！！」

転生した瞬間捨て子でしかも死の危険とか、どんだけですか——！！？

誰か助けて！助けて下さい！

「うぶぶあ——！！」

誰かに気付いて貰おうと叫び続けるが……。

「あぶ……！ぶう……」

眠くなってきました。はい。オワタ。

この動けもせず、数分で眠くなる赤ん坊の体が憎い……。

寒くて体は勝手に震えるし……『ダメだ！寝たら死ぬぞ！』をこんな形で経験することになるうとは……。

こんな転生ならしない方がまだマシだったな……。

「あぶうあ……」

あ、もう……

「……。」

だめっばい……

┌
Z
Z
Z
⋮
└

第1話

俺はラスク。この世界に生まれて今年で3歳になった。

そう。俺は転生していきなり捨て子スタートという試練を乗り越えた、あの赤ん坊である。

結論から言えば、俺は助かった。

寝てしまった後しばらくして、運良く拾って貰えたのだ。

聞けば、俺は数日生死の境目を彷徨ったよう……。。

毛布にくるまれていたとはいえ、あんな雪の寒空の中に数時間放置されていたので当たり前なのだが。

拾われた時にはもう殆ど死んでいるような状態で、何とか一命を
取り留めたという。

そのとき俺を救ってくれたモノというのが……。

まあ、そのことについてはまた後で。

俺も今年で精神年齢28歳。まあ何とか元気でやっています。

そんな俺の目の前で今、一つの戦いが繰り広げられている。

「ふんッ！はッ！どりゃー！ー！ー！」

「ほっ！よっ！ととと。 フォッフォッフォ。 まだまだじ

ゃのっ」

「押忍ッ！！てりゃー！ー！」

広い道場。そしてその広い道場の中にひしめき合う肉、肉、肉。

むさ苦しい溢れんばかりの筋肉達に囲まれて、一人の老人と男性が戦っている。

実際は戦っているというより、老人は遊んでいるといった感じで全力で殴りかかっている男を軽くいなしているのだが。

「フォッフォ」

男が繰り出す拳の連撃を笑いながらかわし続ける老人。

「そろそろ終わりにするぞい」

「押忍！ー！」

「ふん！」

ドガァン！！

老人の一突き。

まるで力を入れているようには感じられないその右拳の一撃で、男は吹き飛び壁に叩き付けられた。

老人が、自分よりも二回りも大きい筋肉質の男を吹き飛ばすというこの光景。

転生する前の俺ならば驚いたかも知れないが、もう何度も目の当たりにして、流石に慣れてしまった。

「これからも精進することじゃな」

「ぐっ…っ…。お、押忍…有難う、御座い…ました…」

「今日はここまでかおう？　　おーい、ラスク！そろそろ帰るぞい！」

「はい」

こっちに向かって歩いてくる老人はあれだけ動き回っていたのに、も関わらず、汗一つかいていない。

高齢による肉体の衰えなど全く感じさせないこの老人こそが、捨て子だった俺を拾ってくれた命の恩人。

名をネテロという。

そう。俺が転生した世界。それはHUNTER×HUNTERの世界だったのだ！

何度も読んだあの有名な漫画。アニメにもなったあの世界に転生したのだ！

死にかけていた俺を救ったのが、念。

あの雪の日。

死にかけている俺を見つけたネテロが、ハンター協会専属の念医師なるものをすぐに呼んでくれたおかげで何とか一命を取り留めたのだ。

『ネテロ』、『ハンター協会』、そして、『念』。

それを知った時、俺は狂喜乱舞した。

魅力的なキャラクター。ハンターという優遇されまくった職業。

それに加えて、念能力！何度自分の念能力を妄想したか分からない。

その魅力的な空想の世界に、今俺は生きているのだ！と。

だが、次の瞬間には絶望した。

どうせならもっと違う世界に生まれたかった、と。

だってそうだろう？

物語の主要な登場人物も、時には何の罪も関係もない通りすがりの一般人まで、ぼんぼん死んでいく。

人の命なんてゴミクズほどの価値もない。

それがHUNTER×HUNTERという世界なのだから。

実際に俺を拾ってくれたネテロも、キメラアントとの戦いで自爆して命を落としたのだ。

原作に登場しない転生者の俺なんて、いつ死ぬのかわかったもんじゃない。

しかし幸いにも、俺はネテロというこの世界屈指の実力者に拾って貰うことが出来た。

一生誰かに守って貰うつもりはない。

そんな他人任せで生きていける程、この世界は甘くない。

自分の身は自分で守らなくてはならない。

せっかくHUNTER×HUNTERの世界に転生したのだから、原作には積極的に介入したい。

そのためには、建ちまくる死亡フラグをぶち折るだけの力が必要になる。

赤ん坊の俺なら、これから幾らでも強くなれる機会があるはずだ。

そう考えて、いくらか気持ちを持ち直したものの、赤ん坊の俺では出来る事に限りがあった。

なんとか情報収集をするのが関の山だった。

そんなこんなで、転生してから既に3年が経過してしまった。

調べが付いたのは今は1985年だということ。

そして、原作開始（ゴンがくじら島から旅立つ年）が1999年。これは漫画を何度も読み返したから憶えていた。

つまり原作開始は14年後。その時に俺は17歳になっている。

14年必死に修行して念能力を会得すれば、最低限ハンター試験

でヒソカに殺されずに済むくらいには強くなれるんじゃないだろうか。

『有難う御座いました！！押忍！！』

心源流の門下生達の汗臭いお見送りの言葉を背に、俺とネテロおじいちゃん（そう呼べと言われた）は道場を後にした。

育ての親の“一人”であり、心源流の師範であるネテロおじいちゃんはたまにこうして俺を道場に連れてくるのだ。

流石にまだ3歳なので鍛錬に参加させられるようなことはないが、そろそろこっちからお願いしようかな〜と思っている。

孫煩惱のネテロおじいちゃんは俺が心源流を習いたいと思っていると知れば喜ぶだろうし。

育ての親の“一人”というには訳がある。

ネテロおじいちゃんは俺を実の孫のように可愛がってくれているが、流石にハンター協会の会長でもある彼は忙しいらしく、たびた

び世界中を飛び回っていた。

つい最近まで乳児だった俺は、当然誰かに面倒を見て貰わなければならなかったので、そう言う場合は人に預けられた。

その時その時で預ける人が違うため、俺の育ての親（自称）はどんどん増えていっている。

そして、

「おいコラ！クソジジイ！！」あたしのラスク』をあんな汗臭い道場に連れて行くなって何度言ったら分かるのかしら！？」

道場から出て少し歩いた所でいきなり現れ、ネテロおじいちゃんに罵声を浴びせる少女。

俺の育ての親の一人。

「あ、ビスケだ〜！」

「久しぶりね〜ラスク！」

俺が少女に駆け寄ると、彼女は自分のお腹あたりまでしかない俺の頭に手を載せて、ぐりぐりと撫でてくれた。

久しぶりって言っても、つい3日前まで一緒にいたんだけど…。

彼女の名前はビスケット・クルーガー。

あのゴンとキルアも師事した、作品きつての美少女(?)である
ビスケも俺を可愛がってくれているのだ。

何というラッキーボーイ。

「ほっほっほ！ なあ〜にが『あたしのラスク』じゃたわけ
！！寒空の中、道場の門に捨てられておったラスクを拾ったのは儂
じゃー！」

「ふん！いつまで経っても名前の一つ決められないクソジジイの
代わりに、その『ラスク』という名前を付けてあげたのは一体誰だ
とおもっているわけ！？そもそもジジイは拾ったっていうだけで、
その後ラスクを此処まで育てたのはあたしでしょうが！」

「儂の名前から取って『テロル』という名前に一度決めたじゃろ
うがー！」

「それじゃあラスクがテロリストみたいじゃないのよさ！」

「おーい……」

俺の声など聞こえないのか、ぎゃーぎゃーと言い争う2人。

目の前で繰り広げられる見慣れた口げんかに、俺はため息をつい

た。

俺を捨てた人間は、どうやら名前を付けるといふことさえ放棄したようで、俺を包んでいた毛布と籠以外は何の手がかりもなかったらしい。

国際人民データ機構にもデータが無かったと言っから、俺の両親は犯罪者か、もしくは流星街の住民か…。

まあ、顔も知らない両親とおぼしき人間のことなんて、米粒ほどの興味もない。

むしろ、捨ててくれて感謝しているぐらいだ。

今はこうして幸せに生きているのだから。

とにかく、名前も何もなかった筈の俺の、この『ラスク』という名前は、ビスケが言っていたとおり彼女が付けてくれた物だ。

ビスケと出会ったのはまだ0歳だった頃。

俺が一命を取り留めて間もない頃、たまたまビスケがネテロおじいちゃんを訪ねてきたときに出会った。

赤ん坊の世話などしたことがないネテロおじいちゃんが、ただオロオロと困惑している様子を見るに見かねて、実際に俺を此処まで育ててくれたのは殆どビスケだ。

原作を読んだだけでは分からないビスケの隠された一面。

やはりビスケも一人の女性だったということか。

国際人民データ機構への国民番号の登録や生態データの登録等も、彼女が全てやってくれた。

母乳……ではなく、市販のミルクを与えてくれたのも、おしめをかえてくれたのも全部ビスケ。

それはもう甲斐甲斐しく世話してくれた。

その甲斐あつて？ビスケは特別俺を可愛がる。

原作14年前なので、ビスケは既に大体40歳をすぎた位なのが……。

既に念能力である魔法美容師まじかるエステを開発済みなのか、筋肉質の大女ではなく、可愛い少女の容姿をしている。

まあ、見た目はどうでも良いんだけどね。

ビスケは原作の中じゃかなり好きなキャラクターだったし。

こんな美少女に育てて貰えた俺は、かなりの幸せ者だろう。

とにかく、こうして2人が俺を巡って口げんかする（ときにはマジの殴り合いに発展する）のはいつものことなのだが、本人を目前にして「捨てられていた」だとか「テロリスト」だとか大声で騒がないで欲しい……。

「……」

ああ……… 通行人の視線が痛い………。

「ラスクー！」

「わっ！」

口げんかが終わったのか、ビスケはもの凄い勢いで俺に抱きつく
と、俺の頭のとっぺんに柔らかい頬を当てて、スリスリとほおずり
してきた。

「ん………ラスク………クンクン。よかった！汗臭くないわ！
今日もラスクは良い匂いだわさ」

「う……。くすぐりたいよビスケ」

「あ………！も………！なんであなたはこんなに可愛いのかし
ら………」

ビスケはそう言うと、体全体で力一杯俺を抱きしめた。

自分で言うのもアレだが、実際俺は幼い子供特有のかなり可愛らしい容姿をしている。

ふわふわと柔らかい金髪に、くりつとした大きな緑色の瞳。

幼いながらも整いまくった顔立ちは、将来は結構なイケメンになるだろうこと間違いなし。

前世ではとても口では言い表せないほどのキモメンだったので…、多分その反動なんじゃないかと勝手に思っている。

って…力一杯？

ギュウウウウウウウッ！

「うぐっ……………！？び、び、す……………け……………」

「（スリスリ）」

「ぐるじ、いいい！……………は、はなじ……………で……………」

「（スリスリスリスリ！）」

助けを求めるようにネテロおじいちゃんの方に視線を向けるが、
どうやら口ではビスケに敵わなかったらしく（町中でおっぱじめる
訳にもいかず）、道ばたにしゃがみこんで凹んでいる。

あ、豆の人ことネテロおじいちゃんの秘書のビーンズさんが来た。
なんだろう。

またネテロおじいちゃんに仕事かな？

あゝあ、連れて行かれちゃった……。

「び、びずげ……もう……ダメ……」

「（スリスリスリスリスリスリスリスリスリスリ！）」

「……ぶくぶくぶく」

俺はラスク。今年で3（28）歳になる転生者。

HUNTER×HUNTERの世界で、今日も元気に生きていま
す。

「スリスリ……。うゝん、堪能した！ってラスク！？泡な
んか吹いちゃってどうしちゃったのよさ！？ラスク……！？」

多分……。

第1話（後書き）

これは酷いキャラ崩壊。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5351z/>

転生者のハンターライフ【習作】

2011年12月18日00時47分発行